特集

温故知新

～過去の『知恩』とともにコロナ禍を生きる④

編集部

令和３（２０２１）年の新春を迎えました。なかなか衰えを見せないコロナ禍をいかに生き抜いていくか、戦後復興途上の昭和24（１９４９）年創刊の『知恩』誌で、過去の誌面を彩った珠玉のことばに学んでいく特集の第４弾です。新春号の今回は、首都・東京で医療の現場に携わっておられる大田由己子医師から貴重なアドバイスもいただきました。

●『南無阿弥陀仏』のお念仏で、今一度、自分をみつめて

「温故知新」の特集をスタートさせた令和２年９月号でも少し触れましたが、法然上人の生誕八五〇年を祝った昭和57（１９８２）年の『知恩』誌に再び立ち戻ってみましょう。今から39年前のこと。世の中的にはどんな年だったか、パッと思い出せる人となかなか思い出せない人がいることでしょう。生まれていない方々も多いかもしれませんね。明るい話題は東北・上越新幹線の開業、映画「E．T．」が大ヒットしたことなどが印象深いところです。他方、防火設備に欠陥のあった東京のホテル・ニュージャパンの火災、羽田沖で日航機が着陸寸前に機長逆噴射で墜落事故、九州北西部・山口県豪雨被害など悲しい出来事も少なくありませんでした。

『知恩』昭和57（１９８２）年１月号の『年頭所感』は、前年昭和56年12月17日に遷化（せんげ）された、当時の知恩院門跡・明誉寛我大僧正（第八十四世門跡、１８８９～１９８１年）による遺稿となっておりました。「新春を迎え同慶の至り…」で始まる所感に目が留まります。

「偉大なる宗教家とよばれるわが師法然上人は、幾多の苦難を乗り越えられ、浄土宗を開宗された…（中略）…（上人は）私たちに〝生かされている喜び〟をお教えくださった（略）。現今